

令和 8 (2026) 年度 病虫害発生予報 第 4 号

令和 8 (2026) 年 7 月 17 日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

予想期間：7月中旬～8月中旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

病虫害の防除を実施する場合は、化学的防除、耕種的防除、物理的防除及び生物的防除を総合的に検討し、総合防除を適期に実施しましょう。[栃木県病虫害総合防除計画](#)

1 水稻 紋枯病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
 - ・現在の発生量は平年並(±)。
 - ・向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の見込み。
- (3) 対策
 - ・薬剤を散布する場合は、穂ばらみ期～出穂期に株元によくかかるようにモンカットフロアブル(F:7)等を散布する。ただし、例年より早くから発生が見られ、発病株率が高い場合や病斑の上位進展が激しい場合は、薬剤散布を2回行うようにする(1回目散布：幼穂形成期～穂ばらみ期、2回目散布：穂ばらみ期～出穂期)。

2 水稻 斑点米カメムシ類(クモヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ、イネカメムシ、ホソハリカメムシ、アカスジカスミカメ、イネホソミドリカスミカメ)

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
 - ・7月上旬の雑草地等すくい取り調査での発生量は平年並(±)。
 - ・7月上旬の水田すくい取り調査での発生量は平年並(±)。
 - ・向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の見込み。
- (3) 対策
 - ・早植コシヒカリの出穂期は県平均で7月25日と予測され、前年より2日遅く出穂する見込みであるため、適切な時期に防除する。
 - ・斑点米の発生を抑制するため、出穂期7～10日後頃(穂揃い期～乳熟初期)に液剤で防除する。その後も発生が多い場合は7～10日間隔で1～2回の追加防除を行う。なお、イネカメムシの発生地域では、不稔を抑制するため出穂期に液剤による防除を行う。
 - ・周辺より出穂が早い、または遅い品種・作型では、被害が集中しやすいため防除を徹底する。
 - ・斑点米カメムシ類の誘引源となる水田内のイネ科雑草、ホタルイ等を防除する。
- (4) 備考
 - ・[病虫害発生予察注意報第3号](#)、[植物防疫ニュース No. 4](#)、[イネカメムシの薬剤感受性検定結果](#)、[病虫害防除のポイント No. 16](#)、[No. 23](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

3 いちご(育苗) 炭疽病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根拠
 - ・現在の発生量は少ない(-)。
 - ・向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の見込み。
- (3) 対策
 - ・本ばへの持ち込みを防ぐため、育苗期の防除を徹底する。

- ・予防を主体に、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ・胞子の飛散を防ぐため、点滴チューブの使用等、水のはね返りのない方法でかん水する。
- ・発病株は早急に抜き取っては場外へ持ち出し、嫌氣的発酵処理（罹病残さを肥料袋等に詰め、空気を排出して口を閉じ、日当たりの良い野外に放置する）後に処分する。

(4) 備考

- ・[病害虫防除対策のポイント No. 21](#)、[イチゴ炭疽病菌に対する薬剤感受性検定結果](#)を当センターHP に掲載中。

4 いちご（育苗）うどんこ病

(1) 発生予想 発生量：多い

(2) 根拠

- ・現在の発生量は多い（＋）。
- ・向こう 1 か月の気温が高い（±）、降水量は平年並（－）の見込み。

(3) 対策

- ・高温下では本菌の活動が抑えられ症状の見えづらい形で潜伏したまま本ばに持ちこまれるおそれがあるため、育苗期の防除を徹底する。
- ・予防を主体として、発病前からベルコートフロアブル（RAC コード F:M7）等を葉裏まで薬剤が付着するように散布する。
- ・薬剤感受性の低下を防ぐため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

5 いちご（育苗）ハダニ類

(1) 発生予想 発生量：やや多い

(2) 根拠

- ・現在の発生量は平年並（±）。
- ・向こう 1 か月の気温は高い（＋）の見込み。

(3) 対策

- ・本ばへの持ち込みを防ぐため、育苗期の防除を徹底する。
- ・化学農薬に対する感受性低下が起こりやすいため、必ず RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布するとともに、抵抗性の発達しにくい気門封鎖剤を活用する。

(4) 備考

- ・ハダニ類は葉裏に寄生するため、薬剤散布時は薬液が葉裏に付着するように散布する。
[ナミハダニ\(いちご\)の薬剤感受性検定結果](#)を当センターHP に掲載中。

6 ねぎ シロイチモジヨトウ

(1) 発生予想 発生量：多い

(2) 根拠

- ・フェロモントラップへの誘殺数は多い（±）。
- ・向こう 1 か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み。

(3) 対策

- ・卵塊や分散前の幼虫は見つけ次第捕殺する。
- ・幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、発生初期の若齢幼虫のうちに速やかに防除する。
- ・抵抗性発達防止のため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

7 だいず・野菜類・花き類 ハスモンヨトウ

(1) 発生予想 発生量：平年並

(2) 根拠

- ・フェロモントラップへの誘殺数はやや少ない（±）。

- ・向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み。

(3) 対策

- ・葉裏をよく観察し、早期発見に努める。
- ・幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに速やかに防除する。
- ・抵抗性発達防止のため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ・施設開口部に4mm 目合以下の防虫ネットを展張し、侵入を防止する。
- ・卵塊や分散前の幼虫は、寄生葉ごと摘み取り、発生源とならないように適切に処分する。

8 だいず・野菜類・花き類 オオタバコガ

(1) 発生予想 発生量：多い

(2) 根拠

- ・フェロモントラップへの誘殺数はやや多い（＋）。
- ・向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み。

(3) 対策

- ・新しい食害痕や虫ふんを目印に早期発見に努める。
- ・食害痕等を発見したら速やかに防除する。
- ・薬剤の浸透性を高める展着剤の利用が有効である。
- ・施設開口部に4mm 目合以下の防虫ネットを展張し、侵入を防止する。
- ・摘除した果実や脇芽に幼虫が寄生していることがあるため、残さはほ場の外へ持ち出し、発生源とならないように適切に処分する。
- ・発生ほ場では、土中に残る蛹を殺すため、栽培終了後、速やかに十分耕耘する。

9 なし ハダニ類

(1) 発生予想 発生量：平年並

(2) 根拠

- ・現在の発生量はやや少ない（－）。
- ・向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み。

(3) 対策

- ・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
- ・化学農薬に対する感受性低下が起こりやすいため、必ずRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布するとともに、抵抗性の発達しにくい気門封鎖剤を活用する。
- ・天敵製剤の活用や土着天敵の保護利用に取り組む園地では、天敵に影響のある薬剤の使用をできるだけ控える。

(4) 備考

- ・[ナミハダニ\(園芸作物\)の薬剤感受性検定結果](#)を当センターHP に掲載中。

10 りんご 褐斑病

(1) 発生予想 発生量：やや多い

(2) 根拠

- ・現在の発生量は多い（＋）。
- ・向こう1か月の気温は高く（－）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み。

(3) 対策

- ・予防を主体に、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ・発生が見られた場合、パレード 15 フロアブル(F:7)等の治療効果の高い薬剤を散布する。

11 果樹類 果樹カメムシ類

(1) 発生予想 発生量：多い

(2) 根拠

- ・フェロモントラップへの誘殺数は多い（＋）。
- ・向こう 1 か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み。

(3) 対策

- ・4mm 目合以下の多目的防災網で園全体を被覆し、被害を防止する。
- ・山林に近い園地や過去に被害の大きかった園地では、飛来状況を特によく観察し、発生を確認した場合は速やかに捕殺するとともに、薬剤散布を行う。

(4) 備考

- ・気温及び湿度の高い日は夜間の飛来量が多い傾向があるので注意する。
- ・合成ピレスロイド剤や有機リン剤は他害虫の天敵類に影響を及ぼし、結果としてハダニ類やカイガラムシ類等の他害虫を増加させるおそれがあるため、使用に際しては留意する。
- ・[チャバネアオカメムシの薬剤感受性検定結果](#)、[フェロモントラップ調査結果](#)を当センター HP に掲載中。

12 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
水稻	いもち病	やや少	少	ねぎ	アザミウマ類	平年並	やや多
	縞葉枯病	平年並	やや多	なし	黒星病	少	少
いちご	アブラムシ類	やや多	多い		ナシハミツクイ	多	多
トマト	コナジラミ類	平年並	やや多	りんご	斑点落葉病	平年並	やや多
なす	アブラムシ類	多	多	きく	ハダニ類	やや少	平年並

○ 今後の病害虫対策

(1) 定植前・定植時の防除の徹底

- ・いちご、トマト、きゅうり等の施設栽培では、定植前～定植後にかけて、施設内に病害虫を「入れない・持ち込まない」対策を徹底しましょう。
- ・定植時の苗に対する薬剤処理（粒剤・灌注剤等）によって、施設への害虫の持ち込みを防止しましょう。
- ・施設開口部への防虫ネットの展張によって、コナジラミ類やアザミウマ類等の微小害虫、ハスモンヨトウやオオタバコガ等のチョウ目害虫の侵入を防止しましょう。
- ・イチゴ炭疽病やイチゴ萎黄病、トマト黄化葉巻病（タバココナジラミ媒介）、キュウリ黄化えそ病（ミナミキイロアザミウマ媒介）等の施設内での発生・まん延を防止するため、定植時に感染が疑われる苗は適切に処分し、健全苗の定植に努めましょう。
- ・施設栽培作物の栽培終了後には、次作に向けて土壌消毒を実施しましょう。植物残さ内の病原菌は消毒されにくいため、ほ場から植物残さを持ち出す等、適切に処分しましょう。また、効果的に土壌消毒を実施するためには、十分な耕起、砕土の実施や、適度な土壌水分管理が重要です。詳細は、[栃木県農作物等病害虫雑草防除指針の技術情報](#)を確認してください。

(2) 水稻 イネカメムシ

- ・水稻・雑草地における斑点米カメムシ類すくい取り調査の結果、イネカメムシが平年より多く確認されました。特に県中部及び南部で多かったため、その被害が懸念されます。
- ・出穂期とその 7～10 日後の 2 回防除を実施しましょう。・[病害虫発生予察注意報第 3 号](#)を当センター HP に掲載中です。

○ 農薬の安全使用等

(1) 薬剤抵抗性発達の抑制

- ・薬剤で防除する際には、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

(2) 有用生物への影響に留意

- ・花粉媒介昆虫（ミツバチ、マルハナバチ）や天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

(3) 農薬適正使用の徹底

- ・6～8月は「[農薬危害防止運動](#)」の実施期間です。
- ・農薬は適正に保管・管理しましょう。
- ・農薬を使用する際は、容器のラベルに記載された内容を遵守し、農薬による事故等の発生を防ぎましょう。
- ・薬剤散布の後には必ず作業内容を記録し、防除履歴を作成しましょう。

○ 1か月気象予報（予報期間：7月18日～8月17日 7月16日 気象庁 発表）

- ・暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

項 目	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	1 0	3 0	6 0
降 水 量	3 0	4 0	3 0
日照時間	3 0	4 0	3 0

○ お問い合わせ等

- ・詳細は農業総合研究センター環境技術指導部防除課（Tel 028-665-1244）までお問合せください。
- ・病虫害情報発表のお知らせは、[X「栃木県農政部 \(@tochigi_nousei\)」](#)、[農業総合研究センターHP \(https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html\)](#)でも御確認いただけます。
- ・[カメムシ防除作戦 HP \(https://www.pref.tochigi.lg.jp/g05/kamemushi.html\)](#)も御確認ください。



X「栃木県農政部」



農業総合研究 HP



カメムシ防除作戦 HP